

倉橋賞をいただいで

丸山くみ子

幼稚園教師になって数年間、諸先輩のなすこと神業の如くみえたことがある。子どもの遊びをある瞬間までじっと見守っていて、“いまだ”と感じた時、教師が様々な形で、役で、素材をもつていくこんでいき、あっという間に活気あふれる遊びに発展させてしまうからである。この“いまだ”がなかなか幼稚にはつかめない。これが少し早ければ教師のひっぱりになるし、少し遅れれば子どもの興味はそがれてしまう。と先輩はのたまう。

いわゆる“教師的カン”というやつである。

確かに幼児教育には、他の教育機関にはない特殊な事情が多い。その一つに、子どもがあることを自分のうちに内実化したか否かをしらべる、確実な手だてがないということもあ

げられる。そこに“教師的カン”の育つ温床があるのではないかと思う。

その最たるものに運動会がある。

去年一年間、現職研（注・お茶の水女子大学における幼児教育現職研究会）において学ばせて頂いた時も、二学期以降実に多く運動会のことテーマになった。しかし運動会をいかにするかは論は百家争鳴するけれど、それでは何故するかと正面きって問われると、自分をふくめて黙せざるをえなかったことも事実である。教師的カンを全面否定する訳ではないが、少なくとももどの人にもわかることばでそれを説明できないものかと思ったのが、運動会を考えることになった一つの動機でもある。

結果からみれば、なにをいままさらあたり前のことをと当初気負っていただけに、自虐的に思ってみたりもする。

今回、倉橋賞をいただいで、喜びよりも先に恥ずかしさともなるのは、このことによるのかと思う。しかしこれが結果ではなく起点であることを、賞を通して再確認させて頂いたことに、感謝しつつ歩んでいきたいと思う。